

なめません。私如きよそ者をも信仰の友として、何の差別なく、よりご親切に群の中の一員として入れて下さいましたことは生涯忘れません。

どんな離れた土地に住んでいようと唯一の神様によって結ばれた友は正に兄弟姉妹であり、肉親の者以上のつながりのあることを痛感しております。数々の思い出は常に私をなつかしくしてくれ、その中でも一番うれしいことは教会学校で教えたお子たちが洗礼をうけ、成長されてC・S教師となられ、ご奉仕下さることです。その喜びは教師であった者だけの知る絶大な報いであり感謝であります。

若い頃から祈りが神に開かれるということを信じたいと思っても祈り不足と聖書の勉強不足から、なかなか聞かれないで過したことを覚えています。しかし今日真剣な祈りは必ず聞かれるという確信を得て生も死も神のみ心のままに、召される日までご用のため色々の形で祈りと奉仕をさせて頂きたいと願っております。首里教会の上に常にみ恵豊かなことを祈りつつ筆を措きます。

首里教会の皆様

80周年記念日を迎えられるおめでとうございます。祝賀会のお招きにまで預かりまして、うれしく存じております。近ければすぐにでも飛んでゆきたい気持ちでおります。

教会総会の書類もお送り下さいまして一頁ずつすっかり見せて頂き、過去1年の皆様様の歩みを懐かしく、うれしく拝見いたしました。

今後みなさまの御奉仕により後世によき神の城を残されます様、遠い地より祈っております。感謝献金を送らせて頂きます。

5月12日 皆様へ

[教会史編さんだより No10 1988]

4) 私の見た仲里朝章牧師

城 間 道 子

皆さんほんとによくおいで下さいました。

遠いところご苦労さまでございます。ほんとにきょうの日がどんなに我々にとって待ち遠しかったかということを皆様に申し上げてございます。私は、日本キリスト教団の首里教会の城間道子でございます。

この大会は主のご計画の賜と心から感謝申し上げておる訳でございます。と申しますのは、この大会を14年前から請い願っておられる方がいらっしゃいました。けれどもこの方は11年前に83歳で召されました。首里教会の牧師でいらっしゃって、ちょうど

18年前におひとりで朝祷会を催され、毎週月曜日の朝7時にみえられ、お近くの方に葉書でお知らせになり、ご自分は首里から那覇まで風の日も雨の日も熱心にご出席になり、初めは6～7名でいらっしゃいましたが、2～3年の間には10名内外になっておりました。会場が狭くなってまいりましたので、村田兄弟の2階座敷に移すことになりました。それから2～3年位したら、もう、是非全国朝祷会をこの沖縄でやろうじゃないかということをおくぐせのようにおっしゃって村田兄弟もずいぶんお困りになり、どうしてこの大会が10名そこで催す事が出来るかといってお困りのようでした。

今から考えますとこの大会はまた、ご希望であり予言であったと思います。

私は仲里牧師のお近くにお仕えしたひとりでございまして、先生のお人柄の一端をご紹介したいと思います。

先生は93年前に首里でお生れになり、お父様が尚侯爵家の家譜職に任じられましたので、お若い時はほとんど東京で育ちになったと思います。大学は東大をご卒業になりご卒業後は教職にお務めになり、また、教会は富士見町教会でご奉仕なさったようでございます。お母様は沖縄のお家にいらっしゃいましたので、大学時代には夏休みには毎年沖縄にお帰りになり、その時から今のキリスト教短大のある所に、高い所でございますが、そこに登られて首里全体を見下ろし首里の人の救いを祈っておられたようでございます。今から考えますと、大学時代から信仰をお持ちになっておられたようでございます。丁度三輪田女学校の教職教頭の頃、お父様がご病氣になりお帰りになりましたが、またすぐ沖縄商業学校の校長として迎えられました。そこで戦争にあわれた訳でございますが戦後は伝道に携わり、地方のあっちこちで家庭集会をして働いておられました。

先生は本当に信仰の実践家でいらっしゃいました。

いつもおっしゃることは、クリスチャンは予言者であれ又神を愛し人を愛し土を愛しデンマークのような国にして下さいと祈っておられたようでした。

おくぐせのように我々にもおっしゃっておられました。また、先生は戦後の青少年の信仰の問題についても心を配られ、土曜学校をやりたいと準備なさったけれども、なかなか子供らが集まらないで、ちょうどあせっておられる時に首里教会の旧会堂がありましたのでそこをお用いになり、そこでキリスト教短大を、本当に小さいキリスト教短大を創立なさったのでございます。そして今はもう、その大学が多くの生徒を社会にお送りすることができました。

またその他に先生は、ご自分のお墓が都市計画のために県に買い上げられ、そのお金を教区にささげ、霊園をお創りになり百家庭の使用できるお墓ができましたので、お墓のない信徒たちは大変喜ばれました。

終戦直後、時計もない時でしたので、時報を知らせるために、朝の6時、昼の12時、夜の6時と古いつり鐘を下げられて、市民にお伝えになり喜ばれておりました。

先生は大変厳しい面もありましたが、また、愛の面ではほんとに隅々までこまかく気をおくばりになり、貧しい家庭や病の人々の家にはほんとによくご訪問なさいました。

車一つもなく全部お歩きになつてのことでございます。

先生はまた礼儀正しく親孝行でいらっしゃいました。お父様が永いことご病気でいらっしゃいましたが、朝のご出勤の時お帰りの時には病室に行かれ、丁寧にご挨拶なさることを実行なさっておられました。

また毎日の日課は、朝は3時に起きられお茶を召し上がり、5時頃から出られ、旧首里城の木の生い茂った坂道を暗いうちから登り行かれ、そこでお祈りをなさるのがご日課でございました。そして朝拝会の月曜日には、そこから那覇に行かれるご日課でございますけれども、本当に普通の人ではいられないような旧首里城といいますとほんとに坂道で木も生い茂ってハブもうようよするところがございますから「先生、危ないですよ」と申し上げると「イヤ、僕は祈りに行くからハブは神が追い払ってくれる」とおっしゃっておられました。

またこんなこともおっしゃいました。私に「僕は大学時代に祈ったけれども今日もまたここで祈るとは不思議でならない」とおっしゃっておられました。

朝拝会を愛しておられた先生は、ご熱心で、一日も欠かされたことがなく、召された週の月曜日までご出席になり、その週の金曜日の午前1時に静かに永い眠りにおつきになりました。

今日の大会をどんなに
お喜びになっておられる
かと思います。

また、この大会について大阪の伊佐兄弟が、非常にご熱心でございまして、2回程沖縄においでになっていろいろと計画したり、祈って下さったり、ご協力下さいました。ありがとうございました。



1972年(昭和47年)12月25日
クリスマスの日 孫達と自宅でくつろぐ(晩年・82才頃)

この原稿は1984年5月パシフィックホテルで開催された全国朝拝会での証です。

[教会史編さんだより No.13 1989]

5) 首里教会と私

呉 屋 峯



首里教会の創立80周年、わたくしの誕生の年で、わたくしにとっては感無量でございます。

当時は教会堂もなく、識名殿内や伊江殿内を借りて伝道をなさったとのことでございます。牧師も他県出身の大保富哉牧師で、言葉や風俗習慣の違う沖縄で大変ご苦労なされた事と思います。また現在の教会敷地も教会婦人の方々が、芭蕉を紡いで資金を作り、土地を購入なさったということをお聞きして、婦人の力、信仰のすばらしさを知らされ、あとに続く私たちの励みにもなります。

わたくしが首里教会にお世話になりましたのは1971年4月でございます。暫く教会を離れておりましたが、退職してからは聖日を守るようになり、CSのお手伝いもするようになりました。メリローさんが上京なさるとき、CSの貯金通帳を預って欲しいと申され、そのままCSの会計も担当するようになりました。

次にCSのことやメリローさんのお働きについて申し述べて見たいと思います。

メリローさんは遠い中部から礼拝に出席なさり、お忙しい中をCSの説教をなさったり、教師会の時にはできるだけお金のかからないようにお食事を作ってくださいました。また婦人会のときもご自分のおうちで前日から準備をなさり、ご主人様が車で運んでくださいました。一番、食事づくりで困るのは停電した時です、とおっしゃった事が印象に残っています。上京なさってから首里教会を愛してくださり、ご奉仕をモットーにされたお働きは私たちも見習わなければと思います。

次は住田さんのお働きについて申し述べて見たいと思います。

住田さんはCSの夏季学校のときは、大きな働きをしてくださいました。献立も子どもの嗜好を考え、栄養のバランスも考慮に入れてメニューを作り、おいしいものを作ってくださいました。買い物も全部ご自分でなさいました。キャンプ場も兼次のキャンプ場で静かな所でした。住田さんはバザーのときにもスパゲティを作ったり、あのお働きは、いまでも忘れることはできません。

私が首里教会に参りましてから特に印象に残っている楽しい思い出を記して見たいと思います。

1975年8月8日、渡嘉敷村の国立青年の家でCSの夏季キャンプがありました。いつもの夏季キャンプは、大人は参加いたしません、金城重明先生のお心づかいで婦人会の方々も参加させていただきました。70代の仲里直子姉、新垣つる姉、新垣久子姉が参加され、わたくしは貴姉方の連絡係として同じ部屋に泊めていただきました。

翌日は阿波連の海水浴場へ参りましたが、貴姉方のあの喜びよう、いまでも忘れることができません。

次は1977年9月4日から翌5日まで、名護浦荘で婦人会の一泊研修会がありました。礼拝後に出発いたしました。が、労れた様子も見受けられず、みんなお元気なようでした。あるご婦人は広大なすばらしいホテルにびっくり、ご満悦なお姿が今も私の脳裏に残っています。夕食後は知花先生の聖書の学びがありましたが、みんな労れも見えずお元気そうです。聖書の学びのあとは各部屋に参りました。私の部屋は、宮城文姉、宮里カメ姉、川田節方とごいっしょでございました。姉方は女学校の同級生で80代、私は70代でございましたが、修養会が終ってから、とても可愛がっていただきました。わたしはあの修養会を通し、交わりの大切さを痛感いたしました。

私は年に1度か、或いは2年に1度でもよいから聖書研修会を兼ねた集会をもち、会員相互の信仰を深めるのが、教会成長のためにもよいのではないかと思います。

[教会史編さんより No13 1989]

6)「首里教会8ミリ映画の記録」

横浜市 川 平 朝 清



首里教会は、私の妻ワンダリーとともに、1957年11月結婚して、寒川の琉球放送の社宅に居を定めて以来、信仰のよりどころでした。

妻はもともと、反戦平和、兵役拒否をつらぬいて来たアナバプテスト・メノナイト派の信者、私は聖公会信徒、昔ならば一緒になるのが仲々むづかしい間柄だったのかもしれませんが。その上国際結婚、アメリカの宣教師から婚約中だった妻への手紙には“川平家は血統を重んずる家柄、よほどの覚悟をもって嫁いで来るべき”とまで書いてあり、それを知った私の母は“それは昔のこと、好き合った二人はもう大人……”と抗議したということでした。母は妻の最良の理解者、擁護者でした。

そして、次々に生まれた長男慈温、次男謙慈、三男慈英は、仲里朝章先生、金城重明先生、そして教会員の暖かいご指導のもとで育ちました。今その三人の息子達はそれぞれに成人し、みんなバプテスマを受けて教会につながっています。

私も、首里教会では、教会学校の教師をはじめいろいろな仕事をさせていただきました。1972年5月、沖縄の施政権がアメリカから日本に返還された後、私は沖縄放送協会から日本放送協会へ職を移し、一家をあげて東京に移りましたが、今手許にある只一枚の首里教会週報（1972年2月13日）によると、名誉牧師仲里朝章、牧師金城重

明、CS校長川平朝清とあります。私の首里教会での最後のご奉仕はCS校長だったのです。

本土へ来て早17年、その間毎年皆さんのサイン入りのクリスマスカードをいただき憶えて下さることに感謝しています。

知花真康先生が折々に送って下さる説教と週報で、首里教会の発展ぶりがよく分ります。礼拝の出席、1972年2月13日の週報では72人とあったものが、1988年7月10日の週報では117名と出ていました。

教会設立80周年、お祝いにお送り出来るものは何かと思案した結果、思いついたものが8ミリ映画です。これを、VHSビデオにまとめてお送りすることといたします。

我が家の子供達の成長を記録したものが中心なので、古いものを試写した中から出て来たものに、先ず1970年8月今帰仁の浜でのCSキャンプがありました。ビーチでの体操そして水泳、子供達が「沖縄の教会地図」を作り、真栄平房敬兄が戦前の首里教会の話をしているシーン、庭でのバーベキュー。

二番目のものは、運動会当日の早天CS礼拝。今でも行っているのでしょうか。

三番目のCS記録は、1971年のクリスマスのプログラムです。幼稚科の歌から、小学科のページェントまで、長々と撮影されています。幼稚科の喜友名静子先生（現キリスト教短大助教授）の指揮ぶりが印象的です。残念なことに当時は同時録音の出来る8ミリ撮影機はありませんでしたので、すべてサイレントムービーです。それから18年、このフィルムに登場した子供達も今ではみんないい青年に成長し、結婚している人も居ることでしょう。そして、何人が今も教会につらなっているのか知りたいところです。

これら一連のCS記録をビデオに移録したあとのことですが、別の8ミリフィルムの中から、何んと今から27年前、1962年の首里教会の記録が出て来ました。私共の三男慈英（1962.9.23生）の最初の教会礼拝の日ではなかったかと思われます。そこには司会の田崎邦男兄や仲里朝章先生のお姿が見られ、礼拝後の教会の玄関先での人々、そして役員会、そこには金城重明先生、鎮西忠茂兄、当山全保兄、城間道子姉、具志頭善子姉らのお若い頃の皆さんが写っています。

首里教会に居た頃の思い出といえば、外に首里、真和志、那覇三教会合同の運動会をはじめたことです。これは、田崎病院第二病院のグラウンドで行なったものでしたが、子供も大人も全員参加の、楽しく、和やかな交わりでしたが、今でも続けていらっしゃるのでしょうか。

それから、崎山に新築した自宅での、首里にあるカトリック・プロテスタント全教会参加の青年懇親会というものもありました。これは、私達夫婦のひそかなマッチメイキングの試みであったのです。

今私達一家は東京の渋谷バプテスト教会のメンバーです。放送タレントの長男は一昨年結婚、その嫁と二人、そして俳優になった三男とは、聖日礼拝の日、教会で顔を合わせます。次男はシカゴで鉄鋼会社に就職、年に数回出張で日本には戻って来ます。妻のワンダリーは相変わらずアメリカン・スクールの教師、私は財団法人放送文化基金の事務局長、そして教会関係では、聖書教会理事をしています。

家内ともども、首里教会が主にあって益々発展され、沖縄の良き証しとなられるよう祈っております。
[教会史編さんだより No13 1989]

首里教会の皆様

1989.2.14

主にあって教会が恵まれた発展を続けておられることを心からお喜び申し上げます。
いつも私共のことを憶えていて下さり心から感謝申し上げます。
近況報告をかねてクリスマスに写した一家のスナップをお送りします。

川平朝清 ワンダリー



慈英 謙慈 裕美
ワンダリー 朝清 慈温

7) 仲里朝章牧師略伝 —学院々長として—

那覇中央教会 石 川 政 秀

沖縄キリスト教学院の創立

戦時中、日本のキリスト信徒は、キリストの福音によって生きるいいながら、日本の国家主義政策に盲従し、ほんとうにキリスト信者らしく、祖国を愛するということができませんでした。とくに教育家の場合、教え子たちを戦場に駆り立て、死地に追いやったという、戦争責任は免れることはできません。たとい心のなかから戦時中の出来事を忘れ去ろうとしても、どこかで痛恨、悔悛が働いて、神と人との平和を訴え、同胞の悩みに近づき、その傷を包もうとする行為をするのは、当然だといえます。この戦争責任の自覚は、戦後沖縄のあらゆる階層の指導者の共通の出発点だったといえます。

仲里牧師は、長年教育の現場にあって、日本の国家主義教育の結果を見きわめ、祈りのなかから、戦後沖縄の人心をみて道徳心の頹廃から救うには、イエス・キリストの福音によらなければいけないと考え、それにはどうしても塾式教育の少数精鋭主義によって、小さいグループのなかに信仰の炎を燃やそうということに主眼点がおかれしました。

1957年4月9日沖縄キリスト教団によって沖縄キリスト教学院が那覇市当蔵町2丁目18番地に設置されましたが、これはふだんの仲里牧師の祈りが現実となったものです。入学を許可された学生は30名、各教派の信徒青年が多く、超教派で、「沖縄の真の平和を祈求するところから、キリスト教的精神文化を基礎とする教育の必要なることを痛感し……キリスト教精神を身につけた人材の養成を目的として」設立されたものでした。(財団法人沖縄キリスト教学院設立趣意書)

教育内容は、神学校の予備教育のように聖書の正しい読み方とか、キリスト教の文化理解などに主眼点がおかれましたが、今日の大量の卒業生を出す大学のマス・プロ教育ではなく、ひとりひとり学長の家と呼ばれて、昼食の招待にあずかり、指導を受けるといった人格主義教育です。学生との懇談会の席上、仲里学長はいつも日本人とアメリカ人との仕事の相違点、日本人は人の見ている前では一生懸命働くが、人の見ていないところでは余り働かない。米国人の陰日向のない働きぶりを見て、これはキリスト教の義務観念の植えつけられているせいだと批評したり、世俗主義大学の卒業生と比較し、あなたがたは短距離では負けるが、長距離ではかならず競争に勝つ、と励ましたりしていました。

仲里学長の講義は、経済学で、ほかに礼拝説教を担当しておられましたが、いつも

大局的な見地から目先の損得計算ではなく、国を興すとか、郷土の復興などを説き、講義のなかでは無教会の内村鑑三、日本共産党の徳田球一（県立一中での同級生）の思い出を語ったりするユニークなものでした。当初2、3年は各種専門学校でしたが、後に3期卒より短期大学に昇格、5、6期より英語科、保育科が併置されました。それには仲里学長の知人、友人が協力し、作文、英文解釈に外間政章、英文学に胡屋朝賞、哲学には関西学院大学から哲学の集中講義に松村克巳、琉球大学から心理学に小橋川慧、体育に小橋川寛、地元の各教会牧師により新旧約概説、教会史、イスラエル史などの講義を担当していただきました。

仲里学長の夢と抱負は、現在校舎の建っている上の毛一帯に山羊を放牧し、デンマーク式の産業と教育を直結した産学経営を夢みたようです。毎朝4時半に起床し、観耕台にのぼり、教会や短大のことを祈りつつ、授業、学校経営にいそしむことを1日の日課としていましたが、初期のころは首里教会を校舎として使用、後に上の毛に5万ドルで新校舎本館が建てられました。（この建設にクライダー宣教師が1万ドルを寄付なさいました。）図書館の一角には仲里学長の寄贈した仲里文庫が飾られてありますが、初めは学長が理事長を兼任し、仲里牧師は宣教師前田伊都子氏に学校経営を担当してもらい、理事長というよりは学生個人との指導に重点がおかれていました。恩師、富士見町教会の植村正久牧師は終生、外国宣教師の支配下にあることを排していましたが、植村正久牧師の指導を受けた仲里朝章は終生、外国ミッションと協力し沖縄と米国諸教会との一致を念願としていました。（この項については遺稿集「世界における教会の再一致運動とO・C・Cに就いて」を参照して下さい。）

無教会との提携

したがって仲里朝章学長の教派を超えた知己の方々がキリスト教学院を支持し、また多くの分野から援助が寄せられました。1957年1月16日、沖縄教職員会の招きで来島した矢内原忠雄氏（当時、東大学長）は1週間の予定で講師として全島各地で講演しましたが、1月20日、首里教会で「平和の福音」と題して説教、多大の感銘を与えました。無教会の内村鑑三氏と富士見町教会の植村正久牧師は、明治のキリスト教界を代表する両雄ですけれども、袂を別ってから何度も和解しようと図ったものの、一生のうちに実現するにいたりませんでした。それが、はしなくもこの前夜那覇市内で東大出身者の集まった「赤門会」で席を交え、また次の日、内村鑑三の弟子をもって任ずる矢内原氏が、植村神学の継承者、仲里牧師の牧する首里教会で平和の福音を講演したのはとっても意味が深いと思います。これから仲里牧師と矢内原忠雄氏との生涯の交流が始まり、矢内原氏亡き後は、後継者、藤田若雄氏（東大教授）と文通往来するにいたりました。

イエスの友の会沖縄支部の動き

賀川豊彦氏は1960年に世を去りましたが、イエスの友の会は活動を続け、沖縄支部は1952年の賀川伝道直後に仲里牧師を中心として結成されました。その夫人賀川ハル会長（雲柱社々長）が1963年来島、各教会で伝道して帰られました。イエスの友の会の五綱領は、イエスにありて敬虔なること、貧しき者の友となりて労働を愛すること、世界平和のため努力すること、純潔なる生活を尊ぶこと、社会奉仕を旨とすることなどです。これらの綱領はふだんから仲里牧師の唱えている、キリスト教信仰の生活化であり、沖縄支部の活動はほとんど仲里牧師を中心として、ことに当蔵町2丁目23番地の新宅落成後は本土からの派遣講師を泊めてもらい、もっぱら仲里牧師の案内で全島各地、離島などを旅行なさいました。講師は、升崎外彦、河野進、久宗莊などが、いずれも仲里家でお世話していただきました。

仲里牧師と学生運動

仲里牧師の周辺に若い学生、宣教師らが集まったのも当然ですが、その学生たちはS・C・M（これはキリスト者学生運動のひとつで米国、ヨーロッパなどでさかんでした。）首里教会などは地元の琉球大学の学生が多くいた関係上、1959年、琉球大学本館裏にあります松林、上ノ毛一带に950坪ほどの敷地を入手、当時、米国伝道局より沖縄キリスト教団に派遣されておりましたチャールス・ハンブリック氏（後に宣教師となる。）、フェリス・ハービー氏（後に宣教師となる。）が中心になり、沖縄キリスト教学生センターが設立されました。両氏が英語を教えたり、読書会、聖書研究を通じてキリスト教を学んだり、夏休みにはエキュメニカル・ワークキャンプに全員が参加していました。

これは単に仲里牧師の影響だけではありませんが、首里教会出身者の学生が多かったのは事実で、学生たちは予言者のごとき仲里牧師の人格と幻から、影響を受けて活動したものでした。よく本土に出張されるたびに、教会のなかに新風を吹きこんだのも、仲里牧師の役割でしたが、また地元の琉球大学の学者、学生に本土の学生運動を紹介して夢と希望を与えたのもそのひとつでした。

1947年ごろ、沖縄人民党の結成に刺激され、仲里朝章、川平朝申、与那城勇などが中心となり、YMCA運動をはじめることになりましたが、それにはまず三和村字米須に「ひめゆりの塔」を建立したいと考え、沖縄民政府工務部の許可を得て、1948年、十字架の建った納骨堂が建てられました。これは仲里牧師の場合、三女光子さんが県立一高女のひめゆり部隊に参加し、この塔に眠っているというのが動機でした。

1961年8月ごろ、東京、大阪、神戸のYMCA活動を見て回った仲里牧師は、比嘉良夫氏（琉大教授）、知念一郎氏（当時、琉大学生、首里教会々員）に説いて、1962年3月に、沖縄YMCAを組織、設立することになりました。会長に池宮城秀意氏

(琉球新報社々長)、常任理事に比嘉良夫氏、主事に知念一郎氏、仲里牧師も理事に就任致しました。

仲里牧師学長を辞任する

1966年3月、米国留学中の平良修氏が帰国しましたので、予ねてから仲里牧師は後進に道を開きたいと辞意を表明、沖縄キリスト教学院学長を辞任することに決まりました。これには前田伊都子宣教師（当時、副学長）によって反対されましたけれども、仲里学長の辞意が固く、学院における10ヶ年の奉仕を終えられました。しかし理事全員によって、名誉学長に推され、その後も祈りをもって奉仕していただくことになりました。ことに従来、仲里牧師が学長と理事長を兼任しているのを解いて、理事長に大森泰夫氏（医師、那覇中央教会員）、学長に平良修氏がそれぞれ専念して、キリスト教学院の経営にあたることになりました。

仲里牧師の生涯でもっともいやな思い出は、戦前の国家主義政策の下で多くの学徒兵の血が流され、本土出身の官僚から散々に苦しめられたことです。戦後は6・3・3制で民主主義教育が機会均等の名の下でいちじるしく世俗化しましたが、たとえば学問の真理探究が単位、資格をとればよいとはきちがえたり、教師对学生の人格的接触をさけて学問修得ができると考えてみたり、安上がりの経営をねらう、産業と教育の協力体制を恐れていました。よほど戦時中の国家主義教育を骨身にしみたのか、沖縄キリスト教学院が短大設置基準で、文部省と交渉していたころ、仲里牧師は、「平良君、文部省のいいなりになってはいけないよ。」と繰り返えし、平良学長を激励なさっていたようです。

[仲里朝章遺稿集・伝記より]

8) 仲里朝章牧師略伝

— 晩 年 —

那覇中央教会 石川政秀

これほど宗教、教育、社会福祉の各方面に多くの足跡を残した仲里牧師の生涯は、さぞ波風のない平穏無事な一生だろうと思われるかも知れませんが、かえって人の知らないところで、聖書を読み、祈り、冥想して神の恵みにあずかったのです。

1960年ごろ、私が与那原教会におりましたころ、ある日、突然、先生が病気に倒れたという電話で首里の牧師館へ呼び出され、枕元で祈ることになりました。先生は苦しそうな息づかいの下から、「石川君、私のために祈ってくれ。」という先生の声に、私は正座して涙を流して祈っていると、暫らくして驚いて動揺していた私のこころも、祈っているうちに落ちつき、平静さを取り戻すことができました。そのとき、旧約聖書の列王紀下20章3節のヒゼキア王の祈りが答えられることを思い出したのです。

そのときから先生は15年近くも活動し、神の栄光のために、多くの仕事をなされたのであります。

また1970年6月下旬、眼の病気に悩まされた仲里牧師は、九大眼科で治療することになりましたが、福岡板付空港では古き時代のよき友、当真嗣教氏に迎えられ、医大病院前の旅館に2泊し、その後、当真氏の主宰する沖縄財団福岡支所に宿り、九大眼科入院の日を待ちつつ、市内各所を毎朝散歩することになりました。その折、物にした和歌に次のようながあります。

ひたすらに眼を開きたまえと祈る身に やり切れぬ思いで鳴くか蟬の声
わが主よ、いやしのみ手のべ給え 樹間の風もそよと吹けかし
筑紫野の川辺に立ちて祈ること
ただ故郷のことのみにして

7月ごろ九大眼科に入院してから後も、隣りの病床に臥している療友に伝道していたようです。

療友の身の上聞けばこころ痛む

ひたすら助主にすがりて勝てと慰む

多くの人は、病気をただ身の不運とあきらめますが、仲里牧師はその災難を信仰の試練と決め、朝夕小石を並べてはヘルモン山、ガリラヤ湖畔を思い、イエス・キリストの足跡を偲んでいたのです。

「患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出すことを、知っているからである。」(ロマ書5章3節～4節)

沖縄キリスト教霊園をつくる

1958年2月、仲里牧師は、松島中学近くにある先祖伝来の墓地をキリスト教会の霊園にしたいと教団本部に申し出られましたが、教団ではさっそく霊園建設委員会(委員長、田崎邦男医師)をつくり発足、琉球政府に申請しましたところ、松島中学校付近は住宅地域との理由で却下、仕方なく墓地を処分、浦添村字宮城原に変更し、1965年12月1日に第1期工事を完成することができました。現在100家族分の納骨室が用意されておりますが、80パーセントぐらいの利用率だという話で、坪数は620坪、付近には末吉の平和公園が予定されており、那覇市のなかにもこんな静かな憩いの地があるかと思うばかりの景勝の名所です。

仲里牧師は予ねてからクリスチャン門中をつくりたいと念願、このため時価数千万円の自家の墓地を捧げられ、これを基礎にして霊園が出来たが、年1回、イエス・キリストの門中が霊園に集まり、付近に記念植樹をしたり、霊園を掃き清めてキリスト教的な祭り、懇親会をするのも、あるいは格好の仲里朝章の記念会になるかも知れません。

朝祷会沖縄支部の創立

晩年の大きな事業としては、朝祷会の創立があります。1965年、仲里牧師は全国朝祷会に出席、そこで大きな幻をみ、さっそく沖縄の各教派の信者、牧師さんがたに呼びかけ、沖縄Y M C A（那覇市松尾）で毎月1回、月曜日朝7時より朝祷会をはじめました。この朝祷会はいまでは、那覇、南部は那覇市松山町1丁目82番地の村田精太郎氏宅で続けられ、常時、20名から30名ぐらゐが出席、中部地区は1972年日本キリスト教団高原教会で行なわれ、知念哲雄牧師の話では、中部の信者、教職のかたが17、8名も熱心に出席されるということです。

仲里牧師の人格的魅力

仲里牧師は首里人としては、めずらしく足、腰が達者で、道を歩くときもさっさと人を追い抜くぐらいの早さで歩き、よく街頭で、子どもから「おじいちゃん」と呼ばれると、「おにいさんといいなさい」と答えたりする、ユーモラスな一面を持っておられました。本土から来られたある教職者の話では、那覇上陸後、首里の町を散歩していたら、向こうから聖歌498番の「歌いつつ歩まん ハレルヤ、ハレルヤ」と歌っている老人がありましたが、その後、朝祷会に出席してみると、沖縄で最初に会ったクリスチャンは仲里牧師だったということです。

仲里牧師の予言者の風格

仲里牧師の人格的魅力は、いつまでも若き日の理想と夢を持ち続け、永遠の青年で、純粋な人であったことです。ヨエル書2章28節には、若者はまぼろしを見、老人は夢を見ることを予言していますが、仲里牧師はヨセフのように夢を見て予言したのではないかと思います。（創世記37章5節）賀川豊彦氏と同じように、詩人的発想を尊び、正義感が強く、物資欲がなく、生涯聖貧に甘んずることを自分の生活目標としていました。毎朝、本土紙の東京朝日新聞、地元の沖縄タイムス新聞を読んで国際的政治感覚を養い、ときどき予言をしては周囲の人々を驚かせていました。たとえば、終戦当時より米国文化のよき理解者であった仲里牧師がベトナム戦争後の米国が、力の政策に終始し、大国意識をもって小国を押しつぶそうとする物質一辺倒を批判し、「米国の力の政策はかならず失敗するよ。」と語っていましたが、それでも自分は毎朝観耕台で、ベトナム戦争を終わらせ給えと祈っておりました。しかしベトナム戦終結は先生の在命中に実現したのであります。

耕南研究社、耕南時報の発刊

ベトナム戦終結後の沖縄で一番問題となる脱基地経済には非常に心配され、財団法人「耕南社」、「耕南産業経済研究所」を設立しようと計画されておりました。この計画を先生の発行したパンフレットの中からみていくと、「1934年（昭和14年）私は父を看病するため一家を挙げて東京から帰り、自宅のうちに産業経済の研究室をつくり

ましたが、戦禍にあい、研究、資料いっさいを灰にしました。」「私は同志の協力を得てこの郷土を神の喜ばるる平和と福祉に満つる島々たらしめ、かつ神と人ともに喜ばるる人物の養成を目的として、この研究機関を創設せんとするものであります。」

晩年の先生のこころを痛めたものは、沖縄の各地に本土資本が入り込み、次々と農民から土地を買収し、沖縄の農業が衰頹していく現状をみることでありました。よほど心配だったとみえて、ある日、私と真栄城暁氏（沖縄農業試験場コザ支場園芸係）を呼びつけ、食事をしながら、沖縄農業を振興してくれるように頼んで、やがて一行は観耕台にのぼり、祈ってから帰ることになりました。すると、先生は私に振り向き、「石川君、信仰の極意は、単純に信ずることだよ。」と、一言おっしゃってから坂路を下りてこられました。

財団法人、耕南社を設立したいという希望から、1972年1月30日、季刊誌「耕南時報」を発刊し、2号、3号と続けておられましたが、1973年2月9日朝10時ごろ、腹痛を訴えられ、医者の指示で救急車で大原外科に入院、ブドウ糖、リンゲルの注射をして、翌日精密検査をすることになりましたが、（入院中もたいへん元気で讃美歌をうたい、祈りをささげたりしていましたが）夜中の1時20分、眠るようにして息を引き取りました。医師の診断では急性心停止とのことです。

晩年のよんだ2、3首紹介すると、

朝まだき白梅屏風を賞しつつ　　ふる里に為さねばならぬ使命あり
瞑想庵に朝祷ささぐ　　　　　　そを果たしつつみ許に往かん
乳と蜜の流るる丘を祷い祈れば
神の恵みは日々新たなり

〔仲里朝章遺稿集・伝記より〕

〔教会史編さんだより No18 1989〕

9) 首里教会と私

山口市 小田 良助



首里教会設立80周年を迎えられ、心からお祝詞申し上げます。

1980年4月、私は山口大学から琉球大学農学部へ転勤することになり、首里赤平町で生活することになりました。クリスチャンである私は、主に導かれるまゝ、首里教会の聖日礼拝に出席するようになりました。初めての日、知花牧師先生は温かく迎えて下さり、礼拝終了時には丁寧に皆様に紹介していただきました。それからの毎聖日礼拝には、小橋川先生、鎮西先

生、多くの兄弟姉妹の温かき交わりをいただき、異なった南国の風習に多少の不安をもっていた私の心を次第に解消して下さいました。

私はクリスチャンになっていて本当に良かったと神様に感謝いたしました。それからの私は次第に教会員の皆様との親しさが増し、何でも打ち開けて語り合う仲になりますと、私本来の楽天性が現われてクリスマスの祝会では寸劇の人気者となり、バザーでは商品の叩き売りの名人となりましたが、皆さまが喜ばれる以上に私自身楽しい教会生活でありました。

私の身分は客員会員でありましたが、教会生活2年近くになりますと、献金当番、遂には礼拝司会まで担当させていただくようになり、重要な奉仕に感激と感謝で胸いっぱいでした。3カ年の勤務を終え、いよいよ山口に帰ることになり、聖日礼拝後のお別れでは、百年の友が去るような友情とお言葉をお一人おひとりからいただき感激いたしました。これも主に連なる者としての幸せと感謝の祈りをいたしました。

ところで、教会生活1カ年を過ぎる頃から会堂建築委員会が設立され、委員長の鎮西先生から礼拝後説明が^る^る行われるようになり、由緒ある会堂を壊して新しく会堂を建設するという。戦後のどん底生活からやっと人並の生活が出来るようになった方々が、一億数千万円の資金を調達するという。内心、私は驚異をもって見守っていましたが、早速、会員の方々は毎月多額の建築献金をされるのにまたびっくり。私も黙ってはおれんと献金に協力しました。1985年10月出張の機会を得て、久々振りに礼拝出席をしましたが、南国風の近代建築の礼拝堂が完成し皆様がたのしく集会をされていることを大変うれしく思いました。

沖縄の兄弟姉妹の皆さまは、戦争中私達が想像し得ない悲惨な苦しみを体験されましたが、パウロは「苦しみが大きければ大きいほど後の栄光もまた大きい」とのべております。従って今日の皆さまの豊かな繁栄が与えられ、幸福な教会生活を送られることと信じます。苦しいときは神さまと共に苦しんで下さり、弱い私達を、私達の弱さを助けて下さるのであります。(ロマ書8章)

末筆乍ら首里教会の上に幾久しく神様のお加護がありますよう祈っております。

(教会史編さんだより No19 1989)

10) 教会学校の思い出

真喜志 淑 子



1946年12月、私は仲里の家族と一緒に北中城村島袋の信者の方々のあたたかいご厚意に依って、島袋の土地に木造テント張りの一軒家（牧師館）を与えられ、生活を営む事が出来ました。当時、教会の建物はなかったので、小学校の校舎をお借りして父は伝道に励んで居りました。そんな或る日、佐久原好信先生が亡くなられ、その後任に父を迎えたいと云うお話がありまして、私共家族は島袋教会の方々とお別れして、郷里、首里に帰って参りましたが、住む家がなく、儀保の叔母の家に間借りをいたし教会に通っておりまして。

当時、会堂は戦禍に見舞われ、十字架と塔は残りましたが、壁や屋根は砲弾を受け、穴だらけで青天井が覗かれると云う状態でした。テーブル、椅子もなく、地べたに板を敷きつめ、その上に毛布（軍の配給）を敷いて礼拝をいたしました。礼拝中に雨が降り大あわてで佐久原さんのお宅に逃げこみ、礼拝を続けた事もあり、今となっては、なつかしい思い出として残って居ります。

その後、ベル先生や、多くの宣教師のお働きによりまして、教会堂と牧師館が与えられ日増しに信者の方も増えて参りました。殊に琉大が出来ましてからは、多くの学生が礼拝に参加する様になり、教会学校のお手伝いをしてくれましたので、教会学校も活気づいて参りました。当時の校長は、比嘉良夫先生で、先生はユーモアがあり、CSの先生方とお友達みたいで、何んでも話し合える方であり、よき指導者で、いろいろな相談にものってくださいました。

現在当教会の役員としてよいお働きをして居られる宜保美恵子姉、知念一郎兄、富永元順兄、崎原盛造兄、そのほか、大城清昭兄、野原朝秀兄、長嶺憲次兄、桑江光子姉、天久育子姉、宮城正子姉、比嘉文子姉（良夫夫人）が大学、高校、中小校の教師として、又社会福祉、家庭婦人として、それぞれ活躍して居られますが、当時の首里教会学校を支え、守り育ててくださった方々です。

毎年恩納のキャンプ場で持たれた夏期学校も大変楽しい思い出でした。

日曜日の午後は、交替で、中部の大山小学校に赴き、小学校の教室をお借りして、教会学校を持ちました。その頃の子供達は落ち着きがなく、私たちの真心をどれだけ受け止めてくれるか、又神様の元にどれだけの子供達を導くことが出来るのだろうか、何時も不安でした。部落の中に入って行き、「大山小学校で神様のお話があるからいらっしゃい。」と云って、そこらで遊んでいる子供達に呼びかけ小学校へ連れてきました。だんだん子供達が私たちに馴れてくると、「シンシー チューヤ カミシ

バイ スミ」「かみしばいもするよ。行こう」と云うと「アンシェー イチュサ。」と、云った様な調子で子供達を集めて礼拝を守ったものでした。礼拝中に屋根裏にのぼって、猫やねずみのなき声のまねをする腕白小僧もいましたが、だんだん落ち着き、神様のお話に耳を傾けてくれる様になりました。

現在、何処の教会学校でも塾通い、クラブ活動等で子供達があまりにも忙しく、教会からだんだん遠ざかって行くと言う傾向が見られ、大変遺憾に思います。

然し、私共の教会は、すばらしい先生方が居られ心強く思います。よき教師の元で、神様のみことばが聞かれる、首里教会の子供達は何て幸福しあわせなんでしょう。

蒔かれた小さい種が、やがて成長して、よき実を結んでくれる事を信じ、祈りつつ筆を置きます。

[教会史編さんだより No20 1989]

11) 首里教会の思い出



名古屋市 柳 勝 司

私は、1981年4月から1988年3月までの7年間、首里教会の聖日礼拝に出席させていただいた。その間、長男と長女が生まれ、沖縄に来たときには家内と2人であったが帰るときには4人になっていた。最初は、子供を抱いて、2、3年後には、ヨチヨチ歩きの子供の手をつないで、といったように、日曜日毎に教会に来る我々の姿にも変化があり、今振り返ると、我々の子育ての開始と重なって、首里教会の礼拝に参加させていただいた頃のことを懐かしく思い出される。礼拝中に、子供が前の方に歩いて出ていったり、泣いたり、叫んだりして、赤面の思いをしたことも何度かあったり、はしゃぎ過ぎた子供が転び頭を打ち、牧師夫人から手厚く手当てをしていただいたこともあった。

私が沖縄で暮らした7年間の間で、首里教会で起った最大の出来事は、会堂の新築であった。私が礼拝に参加するようになってまもなく、会堂の新築工事が行なわれることが決まり、私は、旧会堂の取り壊しから新会堂の完成までのすべてのことを見ることができた。新会堂のすばらしさは言うまでもないが、私には、旧会堂のことも懐かしく思いだされる。惜しくも取り壊された教会の塔は、街の景色とよく調和していた。正面から見ると緑の木々の奥にあった古い会堂は、いかにも教会という雰囲気をただよわせていた。会堂の講壇に向かって右側の窓からは、隣の家の中に植えてあるハイビスカスの赤い大輪の花が見えた。会堂を覗き込むかのように咲くハイビスカスの花は、今でも、聖日の朝の会堂の風景の一つとして、私の思い出の中に必ず現われる。

首里教会の長い長い歴史はこれからも続くであろう。そしてどんなに長く続いたとしても首里教会の歴史の7年間には私と私の家族もいたことが、神様によって永久に覚えていただける。そのことは、何にも比較できないこととしてうれしく思っている。

(名古屋在住)

12) 首 里 教 会 と 私



名古屋市 柳 由美子

首里教会の思い出について、何を書こうかと、いろいろと思い返してみました。過ごさせて頂いた7年間は、そのまま私共夫婦の子育ての思い出と重なり、又会堂も、行事の一つ一つも、お知り合いになれた多くの兄弟姉妹の方々も、私にとって何ともなつかしい存在であり、すべてが思い出深いのです。

私が、主人とともに、はじめて首里教会に参りましたのは、1981年4月の第1主日礼拝でした。

結婚して4ヶ月後、思いもかけない沖縄への引越の直後のことでした。

生まれ育った名古屋以外は、ほとんど出たことのない私でしたから、今ではなつかしく思い出される沖縄の木、花、町並みや、4月にしては強い日射し、お店に並ぶ見たこともない野菜など、驚くことの多い毎日だったので、その頃は、何て遠い所に来たのかしら、と寂しい、不安でたまらない気持ちでいっぱいでした。

ところが、沖縄に来てはじめての記念すべき礼拝も、つわりのまっ最中だったので、苦しくなり、揚句のはてに聖餐式のぶどう酒で酔ってしまったりして散々になってしまいましたが、礼拝中に歌われた讃美歌、「あめなる喜び こよなき愛を たずさえくだれるわが君イエスよ……」352番ですが、不安の中で門をくぐった見知らぬ教会で、この聞き慣れた歌を聞いた時のうれしさ、身体の力がぬけるような、何とも言えないホッとした気持ちになったことを覚えています。

知らない人ばかりの、ずい分遠い所に来てしまったと思っていましたが、実際には少しも遠くないことに気付かされ、力付けられました。

それから7年間、幼い子供たちとともに私達を首里教会に導いて下さり、多くの皆様とともに礼拝を守らせて下さったことを心より感謝しております。(名古屋在住)

[教会史編さんだより No.20 1989]

13) 今も生きる信仰

長谷川 洋 介



私は首里教会で洗礼を受けました。このことにどのような意味があるのでしょうか。どこの教会で受けても洗礼は同じです。なぜなら、皆主イエス＝キリストにつながる教会だからです。しかし主はこの地上に具体的な体を持つものとして、それぞれの地域に教会をお建てになりました。歴史のなかで生きる人々を集めて教会をお建てになったのです。そして主は使徒たちを用いて福音を伝えられたように、今は生きた教会員一人一人を用いて、福音を宣べ伝えておられるのです。

私が首里教会で洗礼を受けたということは、首里教会の信徒たちの信仰が受け継がれたというように考えることができると思うのです。もっと正確に言うなら、聖書が首里教会を通して、私の中に入ったということになるでしょう。

私が首里教会で信仰生活を送ったのは、求道者時代を含めても1年半くらいです。しかし、この1年半の教会生活の中には多くの思い出が残っています。本当に多くの思い出が残っています。求道者のころから日を順に追って思い出していくことができます。でもここでは単に思い出を思い出として書くことは適当ではないと思います。聖書は昔の出来事を単に思い出としては伝えていません。旧約聖書の過越も、新約聖書の聖晩餐も、過去の思い出としてだけではなく、その恵みが現在のものでもあり、将来においても保証されているものとして記念するのです。エジプトから導き出されたことや主の十字架が過去にあった。それは今ここでも信仰の中核なのです。この聖書の考え方に従って首里教会での経験を考えてみたいと思います。

私は現在、日本基督教団の伝道師として働いています。現在の私の仕事にとって、過去の首里教会での信仰体験は決して過去のものではないのです。私は首里教会にいらるころ、しばしば車でお年寄りの送り迎えをしました。車から降りる時に足から取れそうになったぞうりを、その人の前に膝まづいてはかせてあげました。そのころ20代前半でしたが、私には初めての体験だったのです。歩くことも時には思うようにならない、その方たちが何とか礼拝を守ろうとしている。その方たちにそのようにして仕えていくことを通して、自分が打ちくだかれていくのを覚えました。

今自分が働いている教会（熱田教会）でもできるときにはお年寄りを車で家まで送ってあげるようにしています。その他にも、首里教会で与えられた信仰は今でも、そして将来においても私には大きな意味を持つことでしょう。（前名古屋 熱田教会牧師）

（現・沖縄教区上地教会牧師）

[教会史編さんだより No.20 1989]